

長谷村 エコ ツアー 2004



今年度は10月23日と24日、長野県長谷村にて「食」をテーマとしたエコツアーを開催した。参加者は約30名。一日目は鹿嶺高原で野生のきのこ木の実を採り、二日目には愛知和男先生も参加され、地元の食材を用いて郷土料理の調理体験を行った。午後には地元中尾歌舞伎の体験会を行い、食文化と伝統文化を味わう2日間となった。

「食」から見えてくる農村の暮らし

事務局 中村 周

長谷村を訪れるのは数回目だが、これまで何度も雨に祟られていたので、毎回長谷村を訪れるときには、雨の心配をするのが恒例となっていた。しかし、今年に限ってはその心配も杞憂に終わり、幸先のいいスタートを切ることができた。

今年のエコツアーは「食」をテーマにしており、1日目は標高約1800mの鹿嶺高原周辺できのこ採りを行った。初めのうちはなかなかきのこが見つからず、空のきのこの用の袋がさみしかったが、不思議なもので目が慣れてくると、どんなに小さなきのこも見つけることができた。こうなると、きのこを見つけたときの喜びが病みつきになる。童心にかえって必死にきのこを探す参加者の方々の姿が印象的だった。

きのこ採りの帰り道には、山葡萄が大量になっていた。ただ、山葡萄のつるが木に巻きついて、実までは手が届かない。そこで、大量の山葡萄を見て血が騒いだのか、案内役の長谷村の方が率先して木に登り、つるがまきついていた木をのこぎりで切り倒した。このおかげで大量の山葡萄を収穫することができたのだが、手際よさに圧倒されると同時に、山葡萄のために木まで犠牲にする必要はないのではという思いもよぎった。ただ、本来食糧を得るといことは、何かを犠牲にするということでもあり、普段の生活でそのことを忘れていたことにあらためて気づかされた。まさに「食」というテーマにふさわしい、エコツアーを象徴する出来事であった。



大きな石を集めてかまどを組むスタッフ



うすときねでモチつき体験

長谷村エコツアーの魅力とは

事務局 小川 泰史

からっと秋晴れの広がる空。紅葉の山々に囲まれ、遠くには南アルプスが連なっている。私はくつを脱ぎ、両手に持ちながら河原を渡っていた。

今日はエコツアー2日目。川の水は冷たく、川底の小石が足裏を刺激する。他の参加者も水の冷たさに声を上げながら中州に集まった。やがてもくもくと煙が上がる。火の起こし方、石の積み方などで、老いも若きも大はしゃぎである。私はぐるっと空を見上げながら「長谷村に来てよかった。エコツアーを企画できてよかった」と思った。

今回のエコツアー企画は一筋縄ではいかなかった。今年環境文明21が長谷村でのエコツアーを始めてちょうど4年目。長谷村との関係もツアーを重ねることでより深まりつつあった。しかし私たち事務局が気がかりだったのは、長谷村に何を残せるか、ということである。私たちは長谷村から多くのものをもらっているが、私たちができることはどのようなことなのか。

その目標を達成する第一歩として、ツアーのコンセプトを明確にした。それは農業、地域、食のつながりと持続性を考えることと、地域の生活と文化の再発見と相互理解である。そこでツアーのテーマを「食」とし、具体的な企画を考えていったのである。今思えば、最初は変に力が入り、参加者に「効用」のある企画を作ることに腐心していたように思う。



鹿嶺高原できのこ狩り

しかしそうした私のかみは、地元の方々、また事務局のメンバーと何度も話をすることで、良い方向に軌道修正することができた。長谷村のゆったりとした、普段とは違う時間の流れの中で過ごすことを大切にしよう。それこそがツアーの企画を考える上で大切であると分かってきた。

実際、この河原に来て参加者と話しているうちに、まずはこの日を楽しもうと素直な気持ちになった。河原で男性陣が魚を焼いているころ、女性たちは調理場で郷土料理を作っていた。指導の先陣を切るのは長谷村の食文化研究会の皆さん。きのこや山菜を使った色鮮やかな料理が次々と作られていく。やがて餅つきが始まり、男たちは勇ましい姿を見せようと杵を振り下ろす。お餅は手早くちぎり、老若男女でお皿に盛っていった。

すべての調理が済み、食事が始まった。一日目に採ったきのこを入れた「年とりの大汁」、米を挽いた粉でつくる「やしょうま」、煮物やおひたし、焼き魚など、思い出しただけでも心躍るような料理が並んだ。様々な立場の人が、食の豊かさを満喫するひとときを過ごしていたように思う。

ツアー最後の歌舞伎の体験会では、80歳をこえる中尾座の師匠より、歌舞伎の台詞や立ち振る舞いの指導を受けることができた。今回初めてツアーに参加したインド出身で国連大学のラオさんと私は別室に移動し、弁慶とその付き人（女性）に変身。おしろいで顔を真っ白に塗り、髪をかぶり、和服の衣装に着替え、舞台の上で大きな喝采を浴びた。二人とも一生の思い出に残る、強烈な体験であった。

この2日間を体験して、エコツアーは一つの文化事業ではないかと思った。それは、はっきりと見えるものではないが、確実に人の心に残る時間を過ごせること。また継続して行くことでその体験が心の一部に浸透していき、日々の生活を豊かにすると思うからである。環境問題に対処するにあたり、即効性ある活動をするのは大切だ。ただ、それと平行して「いいな」と思えることを、都会や農村の枠を越え、ゆっくりと共有していくことも不可欠ではないかと思う。

最後になりましたが、エコツアーを支えてくださった現地の方々、参加者の方々へ心からお礼申し上げます。

参加者の方々の声（アンケートより抜粋）

鹿嶺高原での食材さがし：

- ・日頃何も苦労しないで飲食していることが本当は大変なのだということが判り、さらに食べられるものの方も見方も勉強になった。

懇親会・郷土料理の調理体験：

- ・地元の皆さんといろいろな種類の酒、地元の踊りなど楽しい時間でした。
- ・もちつきや岩魚焼き、料理づくり、それぞれ楽しいことでした。次回はそば打ちもぜひ体験してみたいです。
- ・お母さんたちの努力に最敬礼！

歌舞伎体験：

- ・「師匠」は指導における語り口が非常にうまく、惹きこまれてしまいました。
- ・私は演技指導の方でなく舞台裏に居ましたが、ラオさんと小川君の変身と変心の過程を見ることが出来、これも楽しい体験でした。

長谷村の良いところは：

- ・自然が良く残っており、地元の方々がみな親切に対応していただくこと。
- ・村長を中心として村起し、活性化を進めているためか、以前と比較して大分明るくなった様に思う。
- ・郷土伝統料理を復活しようとするグループのあること。現状に危機感をもち、積極的な意識をもち環境文明21のような活動に参加する人たちが多くいること。

このエコツアーを「持続可能」なものにしていくためには：

- ・下手な宣伝より参加した人達の口コミ、または出席した人達が満足すれば持続するのでは。
- ・このような楽しい企画をもっと多数の人達に知ってもらいたい。長谷村の皆さんの協力に答えられるgive&takeの関係づくりが必要になります。農村の労働力不足に答えられるプログラムがあっても良いのでは。



中尾歌舞伎座で全員集合